

エリートがあなたに知られたくないこと：神は実在する

——その証明

Greatchain

2019/01/12

ウェブサイト SGT Report は、無神論というものが、決して学界やメディアが想定する中立の立場などでなく、意図され、洗脳された、危険なものであるという立場を取っている。これは、我々のサイトもまた主張してきた立場である。これは究極的に、犯罪にも結びつくことが、今ようやくわかってきた。表題の、**The Elite Don't Want You to Know: God Is Real—Here the Proof** はその一つだ。無神論が企まれたものであることに気づかず、NHK や主流新聞が、幼い子どもをこれによって教育し続けたら、どうなるか？ 我々は、ちょうど明治の文明開化時代のように、知的に遅れた後進国に戻るであろう。なぜ現在のような犯罪的な大事件が、世界的に起こっているのか？ それは、不明の人物 Q や、この SGT などの言う、意識の「大覚醒」(Great Wakening) を起こさせるためだと考えて差し支えない。騙されていた、操作されていた、と気づくことが、同時に霊的に進化するときである。支配者エリートが我々に知られたくない、我々が眠っていてほしかったこととは、創造者の存在であり、彼らは愚民政策として、我々が目覚めず、無神論・唯物論を信じ続けていてほしかった。

SGT のユーチューブ **This Is Why Great Awakening Terrifies Them** (これこそ大覚醒が彼らを怯えさせる理由だ) や、**Dr. B, Truth** なども、同じ主張に基づいている。

神とか宗教とかいう概念そのものが、意図的に作られたもので、現在でも、あのマルクスの「宗教はアヘンである」の時代とあまり変わっていない。科学と宗教が対立しているのではない。無神論科学と有神論科学が対立しているのである。無神論が中立だと信じ込んでいる人々は、今でも「神様が世界をお創りになった」という言い方を笑い物にしている。では三十年ほど前に、私の話を聴いて言った人の「宇宙や人間は、ほっといたらできたのだよ」というのはどうか？

私は昔から、これをもう少し形式化して、Seeing precedes the eye/The eye precedes seeing (見ることが眼より先にあった/眼が見ることより先にあった——precede「先行する」)は、

時間的・構造的な先行) の対立だと説明している。見る意志も意図もないところに眼ができるか？ できると主張し続けているのが唯物論者である。(嘘だと思ふ人は、ダーウィン進化論の代表者リチャード・ドーキンスを読んでみればよい。なぜ彼のような論理が成り立つか驚くだろう。) この宇宙の根底には、見る意志や意図が初めからあった、と主張するのが、世界の古昔からの伝統的な考え方であり、これを「インテリジェント・デザイン」という反ダーウィン進化論が、厳密に科学的に論証した。そしてこれを目の敵にしているのが、エリート支配者である。文献はいくらでもあるが、彼らは読まないように勧めており、この論証の仕方に賛同した多くの教授や教諭が、クビになっている。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180320.pdf> また、『ダーウィニズム 150 年の偽装：唯物論文化の崩壊と進行する ID 科学革命』

表題のユーチューブは、主宰者が「今は霊的戦いが焦点になっている」と、現状を正しく認識した上で、*In Case Against Darwin: Why the evidence should be examined* (反ダーウィン論：なぜ証拠を調べなければならないのか?) を書いた James Perloff に話を聞いている。彼は ID 理論の一人ではないが、基本的には同じで、ダーウィン (信者) が主張する、種が徐々に他の種に進化した証拠は、一つもないと言っている。ダーウィニストとは、そもそもその間違った事実を固守する人々だ。

しかし、「そんな昔の生物学上のことなんか、どうでもいいではないか」と人は言うかもしれない。どうでもよくはない。ただ問題は、そういう間違いが正しい常識として、意識の底に前提として定着することによって、今問題になっている「霊的戦い」が全く視野に入っていないことである。神と悪魔の戦いなどというものは、彼らにとっては、全く絵空事である。より霊的に進んだ立場から見れば、彼ら唯物論 (無神論) 科学者は、はめられて悪魔側に付いているのであって、彼らの方が非現実的なのだ。唯物論的思考が、科学的思考の前提であるわけでないことが、やがてわかるであろう。

これは実は、最近、急激にわかってきたことである。かく言う私自身も、数十年前までは、唯物論者ではなかったとは言え、その意味をよく理解していなかったために、道徳的なものを含めた、いくつもの判断の間違いを犯したことを、認めなければならない。今はそれを繰り返さない自信がある。これが私だけでなく、きっと多くの人々の体験ではなかと思う。それは、我々のブログ (アメブロの方) の記事の中で、ダントツに最も多く長期連続して読まれているのが、「レディ・ガガ：私は、魂をイルミナティ暗黒勢力に売った…」であることに、現れているのではないかと思っている。このような結果は全く予想しなかった。おそらくこれは、聖書に書かれているような、イエスの悪魔との取引と同じことが、現実のレディ・ガガと悪魔の間にも起こっていて、人間の魂が、神と悪魔の間で取引されるということに対する驚きが、あまりに大きいからであろう。

同じような体験をした科学者（病理学者）の生々しい告白が、あとの2つのユーチューブに収められている。ドクターBは、ごく標準的な、神も悪魔も信じない、そして自分の唯物論的方法が、科学の最も客観的な方法だと信じている、思い上がった学者だった。それが恐ろしい現場に潜入することによって、見事に崩れてしまい、涙とともに「真実」を知る体験をした。彼女は、墮胎が日常行われている現場を体験した。それは頭で考えて論じていたようなものでなく、「悪そのものと対面する」体験、神に向って許しを叫ばなければならないような体験だった。やがて彼女は更に、ピザゲートで知られるような、人間をかけ離れた悪魔の世界があること、悪魔が現実にも目の前に顕現することを知った。またその逆の神が現れることも知った。要するに、通常の学究生活で究明する知識など、全く取るに足らぬことを知ったのである。

この世界は、我々が自己満足的に切り取っている世界よりも、遥かに広く深い。それは次元的に深く、霊的に高い世界でもあり、逆に、経験したことのない恐ろしい世界でもあるらしい。そういう経験が、我々人間を待っていることを、（しばらく姿を隠していた）デイヴィッド・ウィルコックなど特異能力をもつ人々が、ユーチューブによって盛んに警告するようになった。そこにはETやUFOとの出会いがあるらしい。それを疑う理由はないだろう。少なくとも、小さな檻の中から、広い外を見てあれこれ判断することは、我々にはできない。ウィルコックなどは、その情報をもつために、何度暗殺されたか知れないという。なぜ殺されねばならないのだろうか、考えてみるべきである。 ——以上